

市川市 国府台遺跡 (第 13 地点)

国府台遺跡は下総台地西端にあり、西に東京低地を望む標高 20mをやや超える平坦な台地上に位置します。国府台遺跡はその遺跡名からもわかるように、近隣に下総国府が置かれていました。現在、調査をしている一角は約 370 m<sup>2</sup>の調査面積で、縄文時代の陥穴3基、7世紀後半～9世紀にかけての竪穴住居 13 軒などが見つかリ、遺構の密度がかなり濃いことがわかりました。調査地は現在では病院敷地内の駐車場ですが、戦時中は軍関連の施設があったところで、戦後も一部が継続して使われ、建物の基礎や廃材を埋めた痕跡などが攪乱として多く残っていました。そのため竪穴住居などの遺構も大半が攪乱を受け、遺存状態は決してよくはありませんでした。出土遺物としては土器類が大半を占めますが、なかには灰釉陶器や緑釉陶器などもあり、通常の集落とはやや異なる様相もうかがえます。

遺構の実測作業では、5月の速報に掲載したデジタル機器とそのデータから描画するソフトを本格的に導入して作業を進めています。当初は目新しい環境のなかで、耳慣れない用語と習得することが多く、戸惑いが強かったのですが、半月もすると少しずつ慣れてきて、今では日々の作業でとても活躍しています。トータルステーション(※)が自動追尾の機能をもっているおかげで、測点にたてるリモートキャッチャーのプリズムを常に追いかけていくので、実際の作業は調査補助員2名で可能です。なおデータの管理・保存やバッテリーの充電など、これまであまりなじみのない作業も加わってきました。

トータルステーションで計測したデータからコンピューターが自動的に作図していく様子は、平板などによる実測に慣れ親しんできた世代には隔世の感があります。

(※) 計測したい場所(測点)に置いた反射プリズムに向けて光を発射し、光が往復する時間などにより距離を測る光波測距儀と、水平・垂直角度を計る経緯儀を併せた測量機器。複数の測点の位置データをつないでいくと、上からや横から見た図面を作ることができる。



奈良・平安時代の竪穴住居跡



遺物出土状況



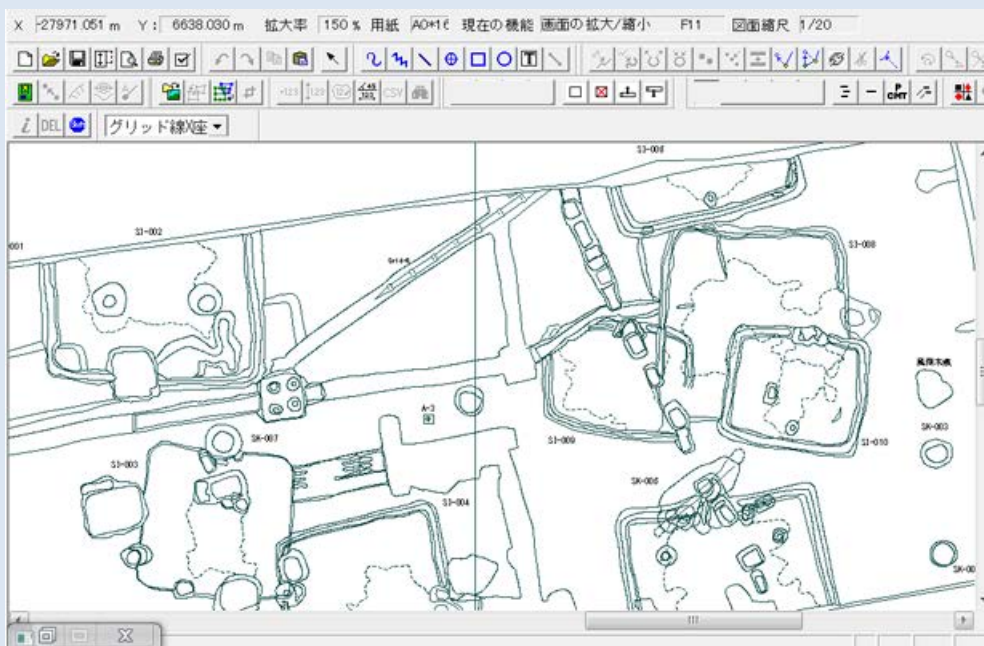
縄文時代の陥穴(おとしあな)

### デジタル機器による実測風景

リモートキャッチャー  
(反射プリズム)

測点

トータルステーション



パソコンの画面に表示された遺構を上から見た図面